豊後大野市立新田小学校
４年生　制作
絵本「カボスン ストーリー」

豊後大野市特産物

かぼす のよさを伝えよう

カボスン Story（ストーリー）

作：2018 新田小 4年生
（文・絵：玉田彪・神田道田郎）

カボスのよさを広めるために、みんなでがんばって
つくりあげた絵本です。
ぜひ、最後まで読んでみて下さい♪

絵本リーダー　玉田虎
神田蓮太郎

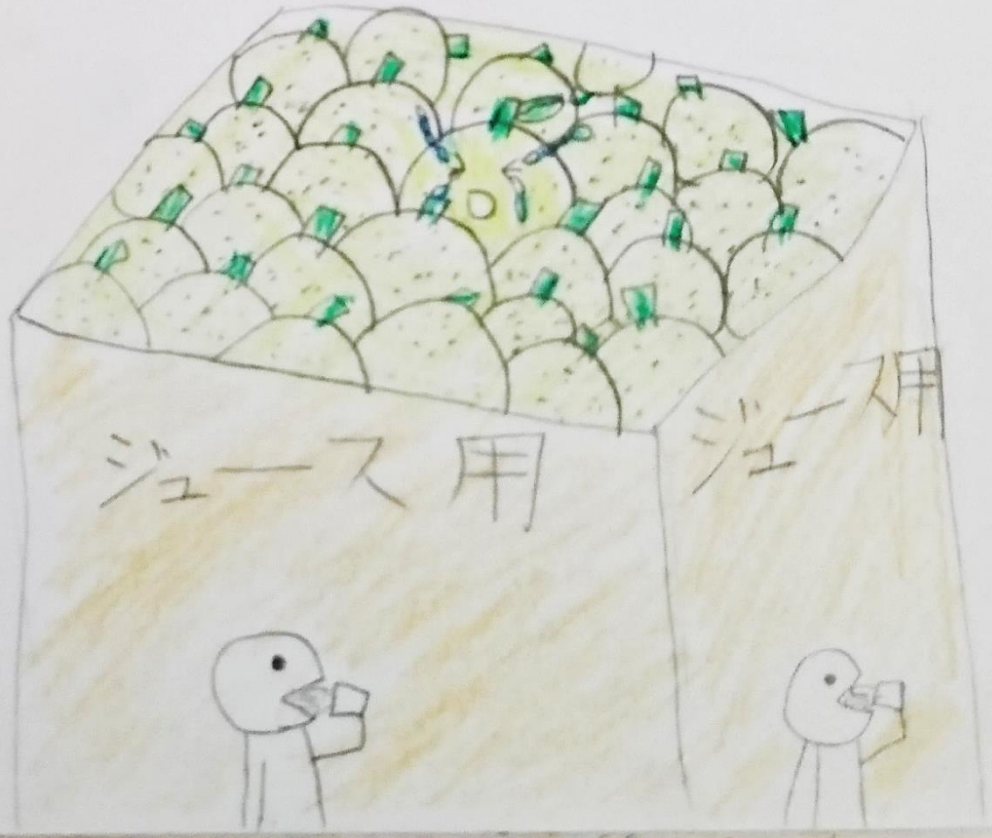
むかし むかし、豊後大野市の三重町に、

「カボスン」というかわいいカボスがいました。カボスンは、今日しゅうかくされました。

しかし、明日には、もうジュースになってしまうのです。

カボスンは、「せっかく木からはずされたのにすぐにジュースにされるなんて！」と思い

ずっと泣きつづけました。 外の世界をもっともっと見たかったようです。



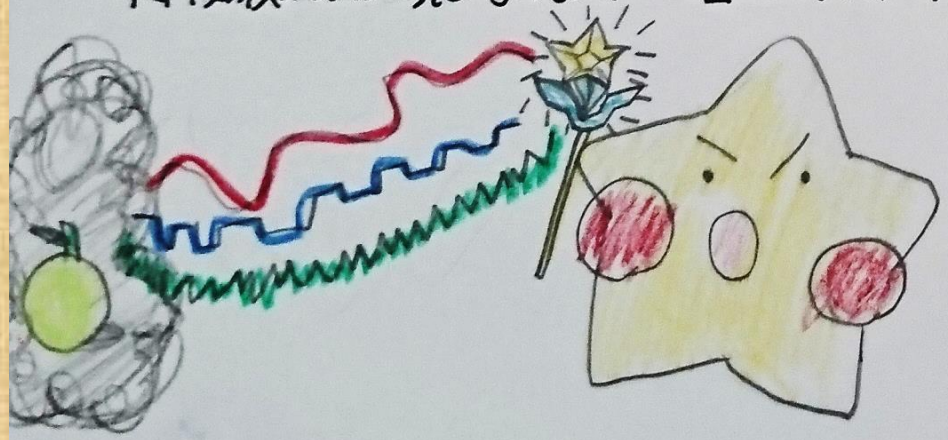
すると…。外のまどから見ていた星がカボスンのところにやってきました。

カボスンは、「あなた、だあれ?」ときききました。

星は、「わたしはキラリンです。」といいました。

そして、カボスンはキラリンにおねがいをしました。「外を歩ける体をください」と。

キラリンは「分かりました。そのかわり4日後の夜でまほうがとけてしまいます。だから、4日後の夜までにはぜったいもどってきなさい。」とつたえ、カボスンにまほうをかけました。



キラリンにまほうをかけられたカボスンは もくもくけむりにつつまれました。

カボスンは、びっくりしました。なんと、カボスの体に手と足がはえていたのです。

「うわー♪やったー♪ これで外の世界をみることができるぞー」とよろこびました。

また、キラリンから、カボスの花をもらいました。カボスンは、大よろこびしました！

「キラリン！ありがとう！じゃあいってくるね！」と、カボスンはでかけていきました。

まほう 1日目

カボスンは、いろんな所に歩いていき、思い出をつくりたいと思いました。
歩いていると一けんの家につきました。カボスンは「ピンポーン」と
インターホンをおしました。出てきてくれたお母さんはカボスンをお家の中に
やさしく出むかえてくれました。

家へ入ると男の子がおちこんでいました。「男の子はどうしたんですか？」とたずねました。
お母さんは、「わたしたちの家は、びんぼうなんです。それでとなりの家からみそシルを
もらったので3日間食べつづけているのですが、むすこは「いやだ」というのでこまっています」
といいました。

そこで カボスンは リビングにいる男の子に「みそしるにこれをかけて食べてごらん」と自分の体をちぎってわたしました。

男の子は もらったカボスをみそしるにしぼりました。すると みそしるから とってもとってもいいかおりがしてきました。

みそしるをのんだ男の子は「わあ！すごくおいしい！」とにっこりえがおになりました。

お母さんも おおよろこびしました。

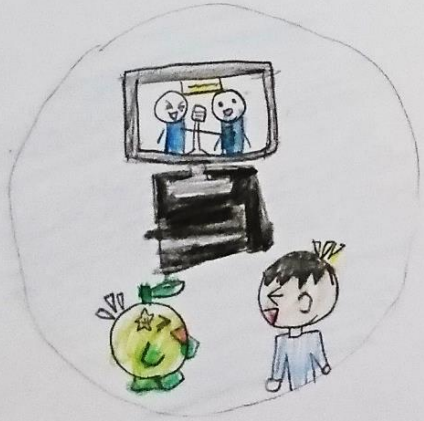
みそしるをのみおわった男の子とお母さんは カボスンに「ありがとう」と

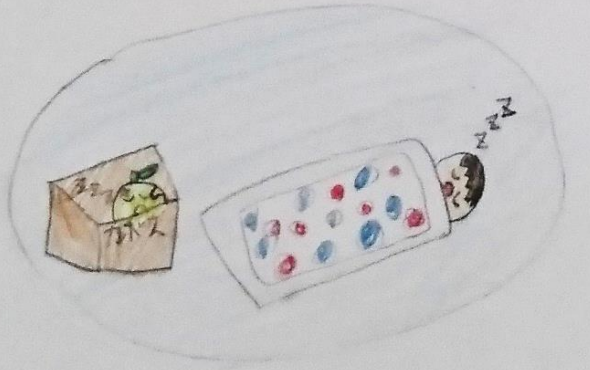
おれいをいいました。

カボスンは「ぼくのカボスでごはんがおいしくなって人によろこんでもらえた」と

うれしいきもちになりました。

そして、その日はそのお家にとめてもらうことになりました。





まほう２日目

お母さんと男の子とおわかれをしたカボスンは、「今日は町へでかけよう」と、ルンルンで歩いていきました。

歩いていると、道ばたに、女の子がおちこんだかおで歩いていました。
カボスンが「どうしたのですか？」とたずねると、女の子は答えました。

「さいきん、はだがカサカサしてあれているの。いろいろ薬をぬってもなおらなくて…」
とかなしそうにいいました。

カボスンは、「じゃあ、これを食べてください」と自分の体をちぎってあげました。

女の子がカボスにかぶりついてしばらくすると、なんと…

女の子のはだのカサカサがなくなり はだがピカピカとかがやきはじめました。

「やった――!!!」 はだあれになやんでいた女の子はおおよろこびしました。

カボスンも、よろこぶ女の子をみて「ぼくのカボスで、はだがきれいになったし、人によろこんでもらえた」とうれしいきもちになりました。

その後、カボスンと女の子は、町でお買物をして1日楽しみました。

まほう3日目

カボスンが、朝早くからおさんぽしていると、ぐったりとしたカメさんと会いました。
「どうしたの？」とたずねると、カメさんは、「ぼく、うさぎちゃんとかけっこをしていたんだけど
つかれがたまってがんばれないの」といいました。
そこで、カボスンは、「よし、じゃあさ、ぼくのこれをあげるからさ、食べてみて！」と、
カボスをわたしました。

カメさんがカボスを食べてみると…

なんと、つかれがふっとび、力がみなぎってきました。

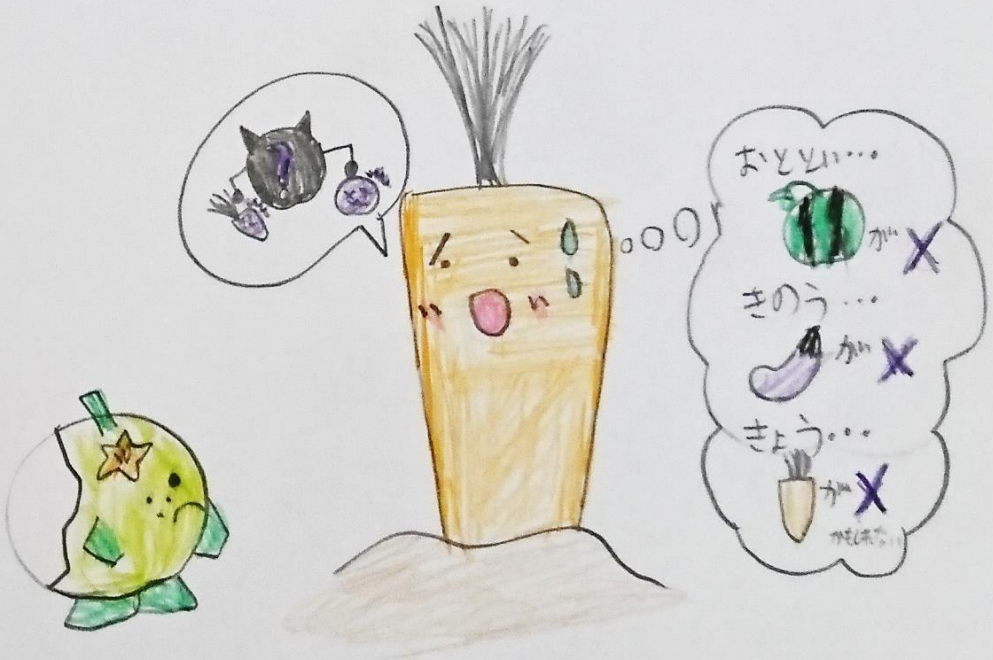
「ウォォォー！力がわいてきたー！つかれもとれたし、かてるきがするぅー」と、

カメさんはいいました。

「ありがとう！カボスン！これでうさぎちゃんにかてそうです。」とカメくんはおれいをいいました。「よかったね！じゃあがんばってね」と言い、カボスンはカメさんとお別れしました。カメくんは、ものすごいいきおいでゴールに向かって走っていきました。そのようすをみて、カボスンは、「ぼくのカボスで、つかれがとれて元気になってもらえた」とうれしい気もちになりました。

まほう 4日目

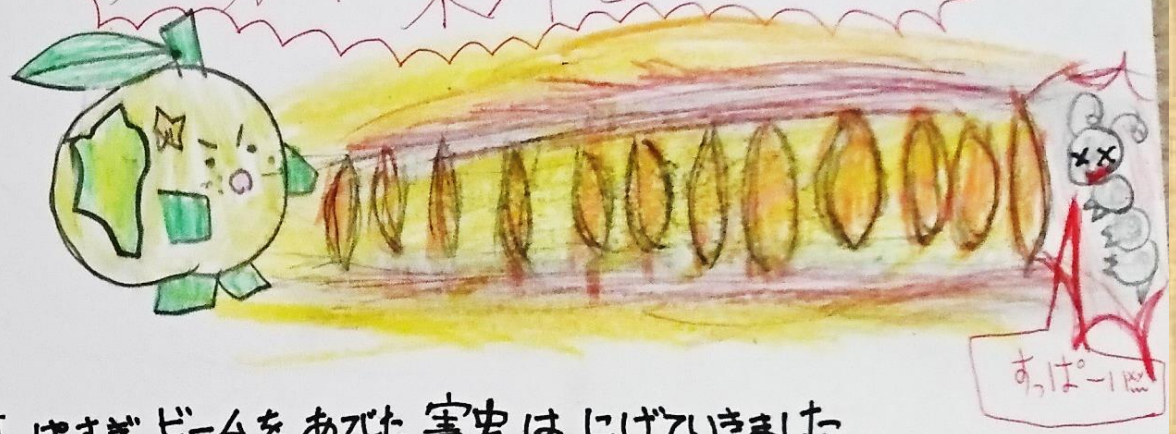
カボスンがあるきつづけていると、しらない町にきてしまいました。
すると、「たすけて〜〜〜」という声がきこえました。声のする方へいくと、
大きな畑がありました。しかし、畑にあるやさいのほとんどが
へしおられていました。「どうしたんだろう」と思いながら近づくと
ニンジンだけが生えていました。「何があったの？」とニンジンにたずねると、
「おとといからここの畑はすいかがやられ、次になすがやられました。もしかしたら
わたしたちもやられてしまうかもしれません。」といいました。



「やられるってだれにやられるの？」とカボスンがたずねた　その時
なにかが畑に入ってきました。「だれだ！」カボスンがいうと、「オレは害虫だ」と
虫があらわれました。ニンジンは スイカ やなすを やった害虫におびえました。
カボスンは、「今すぐ畑から出ていけ！」といいましたが 「オレのじゃまをするやつは
くってやる」と カボスンにむかっていきました。 そして、カボスンと害虫のバトルが
はじまりました。

!必さつ!

スッパ果汁ビーム波



すっぱすぎビームをあびた害虫はにげていきました。

ニンジンは、「助かりました。ありがとうございました」とおれいをいいました。

カボスンは、「ぼくのカボスは※1フラボノイドで害虫から身を守れるし、たくさんのしるも出るし、そのおかげで、助けることができた」とうれしい気もちになりました。

※1 フラボノイドは自分に色をつけるためや、虫やしかいせんから自を守るためにある。

宮史との たたかいをおえた、カボスンは「はっ」とおどろきました。
いつの間にか 日がくれ、夕がたになっていました。
「4日目の夜までに 帰らないといけない人だった」と大いそぎで
もどりました。

なんとか夜までにかえりついたカボスンは、さいごにやりのこしたことはないかかんがえました。

楽しいこと、おもしろいことなど、キラリンがくるまでになにかできないかかんがえました。

そしてカボスンはきめました。

「だれかのためにやくにたちたい！カボスをもっともっと食べてほしい！」とつよく思いました。

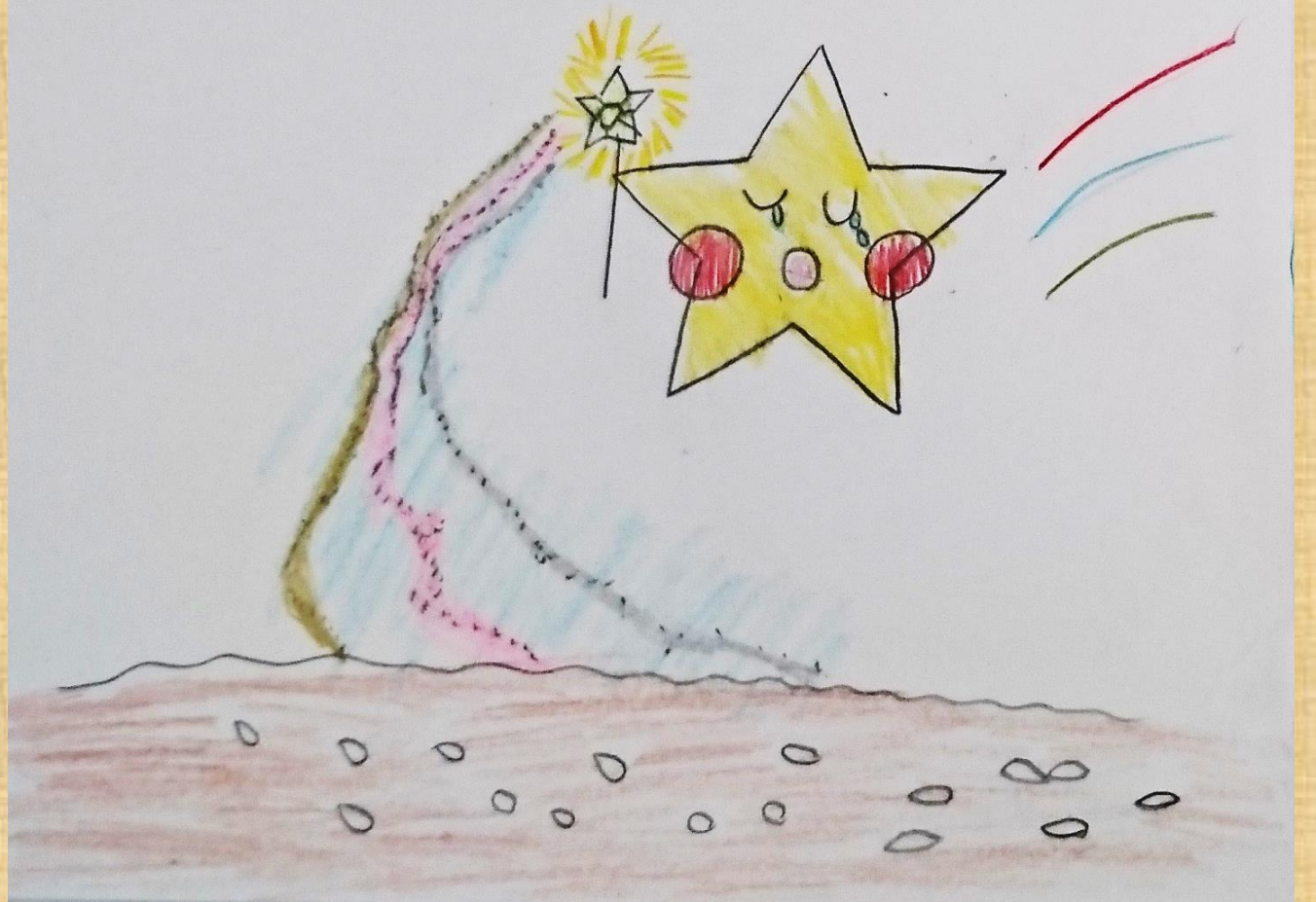
カボスンは、一生けんめい自分のたねをまきました。すがたがかわっても

がんばってがんばってまきつづけました…。

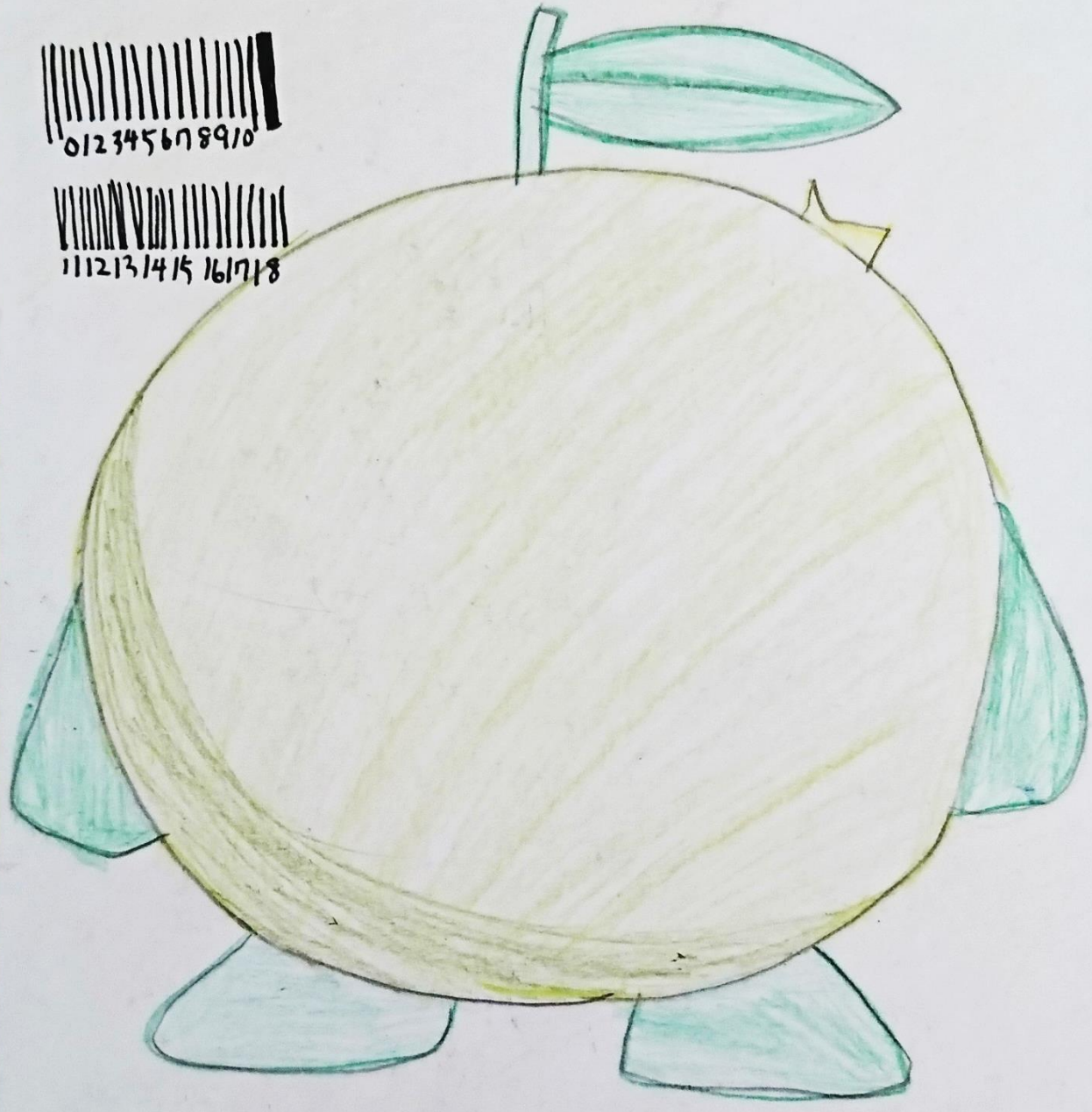
夜になって、キラリンがやってきたときには、カボスンのすがたはありませんでした。

でも、そのかわりに、土の中には、カボスのたねがあたり一面にいっぱいまかれていました。

キラリンは、考えました。そして、そのカボスンのまいたカボスのたねに、まほうをかけました。



すると、土の中から めがでてきて みるみるうちに 木となりました。
何もなかった土地から、1本つもの 木が生え、そして、その木には
大きなカボスが いくつも いくつも なっていました。

今では、そのカボスの農園は、「川崎カボス農園」として
日本最大のカボス農園になっています。

たくさーんのんにカボスを食べてもらい、たくさーんのんにカボスがあいされるようになりました。